

人間関係学部比較文化学部 完成年度記念講演会 ご挨拶

比較文化学部長の斉藤恵子でございます。ちょうど4年前の11月6日、今日と同じような美しい秋日和の日に、この大講義室で、大妻女子大学比較文化学部と人間関係学部の開設を祝う式典が行われました。それから4年、みなさまのお蔭様で、二学部とも今年無事に完成年度を迎えることができました。ここまで支えて下さいましたみなさま方に感謝の念で一杯でございます。この新設二学部の開設に深く関わって下さいました中川秀恭先生をお迎えして、今日ここに記念講演会を開くことになりましたのは、ほんとうに嬉しく光栄なことでございます。

大妻学院のように古い伝統をもった大学が新しい学部をつくることの意義を考えてみますと、創設者大妻コタカ先生の建学の精神と、それを実現していく学部とは、ちょうどぶどう酒とそれを容れる皮袋との関係にたとえることができるのではないかと思います。どんな芳醇な上質のぶどう酒も、同じ皮袋に長く容れておけば「よどみ」が生まれます。また、二千年前の書物にも書かれていますように、新しいぶどう酒を古い皮袋に容れると、皮袋は破れてぶどう酒は流れ出て、皮袋もだめになる。「新しいぶどう酒は、新しい皮袋に容れるものだ。そうすれば両方とも長持ちする。」(マタイによる福音書9章17) この「両方とも長持ちする」というところに深い真理があると思います。

20世紀の始めに創設された大妻が、20世紀の末に、21世紀を目指して「比較文化学部」をおつくりになったのは、まさに「新しいぶどう酒を新しい皮袋へ」という、時代の要請があったからにはほかなりません。激動する世界が、世界的な視野から日本と日本文化を把握して、多くの民族や文化から成り立っている世界で、違いを尊重しながら生きていける人材を必要としています。

この学部で4年間学んだI期生が卒業していこうとしていますが、彼女達に感想を聞いてみますと、1、2年生で、日本のこと、文化交流、国際関係などの授業を聞いた時には何が何だかわからず、ただ夢中で必要な科目をとっていただけであった。3、4年になってアジア、アメリカ、ヨーロッパ各コースのセミナーや、卒論へと続く総合ゼミで勉強するにつれて、日本と外国との交流関係やつながりがわかり、「比較」という視点が、それをはっきりさせてくれることに気付いた。それにつれて、1、2年の授業の意味もよくわかってきた。昨年9月のアメリカの政治・経済・軍事の中枢部へのテロがあった時も、イスラムの授業を聞いていた自分達は、背景に非常に複雑な要素があることを理解することができた。この学部に来て、常に多面的にものをみる習慣がついた。この学部に来てほんとうによかったと感想を述べてくれました。

私達の比較文化学部では、学院のご配慮により、少人数教育を実現させていただいており

ます。このことに私はとりわけ深い感謝の念をあらわしたいと思います。昨今、大学における教育の場でも、「IT化」ということがいわれておりますが、どのように時代が変わっても、私は教育の原点は「寺子屋」だと思います。対一の教師と学生とのふれ合い、そこに教育の極意があり、醍醐味があるのではないかと。

古い言い伝えですが、「目に見せて 説いて聞かせて させてみて ほめてやらねば 人はきくまじ」という言葉があります。母親が子供をしつけ、導いていく時の心がまえとして、私の心に刻まれている言葉ですが、私達の学部での教育を、とりわけ「させてみて ほめてやる」ことを可能にして下さったのは、少人数教育であります。比較文化学部で学んだ学生の満足感もそこからきていると思います。

このような学部の特色を今後も、私達はしっかりと守り育てていかなければならないと決心しております。

これをもちまして、私のご挨拶とさせていただきます。

齊 藤 恵 子